

白杵 陽 著

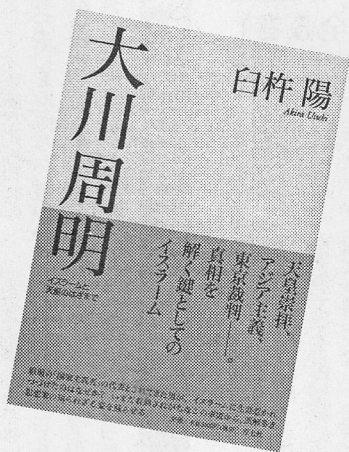
大川周明

イスラームと天皇のはざまで  
8・30刊 四六判342頁 本体2400円  
青土社

# 大川周明という思想史上のタブーの転覆をめざした挑戦の書

イスラーム学の今日的地平から大川のイスラーム論、天皇論を検証

友常勉



竹内好が「日本のイスラーム研究の最高水準」「日本帝国主義のアジア侵略と直接には何の関係もありません」、そこに「学者としての節操がかかっている」とまで称えた『回教概論』(一九四三年)を書いた大川周明は、今日、アジア主義にもとづく東西文明対抗史観のバイオニアとして、さらに国際的な反米主義の「先導」として、ブームの観を呈する。だが竹内によれば、大川は「行動者であるよりも認識者」一肉眼よりも悟性的なほうを信用するタイプの思想家であった。したがって、その煽動的で時局に粉飾された言動とは区別して、大川は冷静に読まれなければならぬ。だが、最高水準のイスラ

ーム研究者であった大川を、今日のイスラーム学に照らし合わせて検証する試みは、本書を待つまでもなくと皆無であった。多くの場合、「イスラームのイメージには二つの顔」がある。外面的生活における律法的で超越的なイスラームと、内面的生活における精神的で個人的なイスラームである。著者によると、大川は青年期と晩年に預言者ムハンマドに強い関心を抱いた。そのムハンマド理解には宋学(朱子学)の超越的な宇宙合一・理気一元論や、青年期に耽読したシュライエルマッハーの汎神論的宗教観、信仰を道徳と考える「抱一無難」などの思想が反響している。

ムハンマド論において、大川は内面的で精神的・個人的なイスラームの方に傾いていた。しかし、代表作である『回教概論』は内面的なイスラームを語る「スーフィズム(イスマーム神秘主義)について語っておらず、律法的で超越的なイスラームの傾向が強い。すなわち大川のイスラーム観には振幅がある。竹内や橋川らの論者はこの振幅を見落としている。竹内が『回教概論』を絶賛したのはそのためである。竹内の言葉が誤っているのではない。宗教思想を専攻した青年・大川が、イギリスによるインド植民地化の現状を知って義憤にかられ、大東亜共栄圏のイデオログとして自己形成し、日中戦争に際して、「アジア一如」としての日本を中心にしたアジア主義論が崩壊していく、その転変のなかで大川のイスラーム観をみなければ、総括の言葉を吐くことはできないというのである。

イスラームの「断層」には「神と人とを峻別」するイスラームと、神・自然・人生を直観的・体験的に生命の統一体として把握するイスラームとの「断層」もある。大川の場合、このことは「現人神」

による最良のイスラーム研究を消化していた学究・大川が、こうして、著者は、イスラーム研究史に基礎づけながら、竹内らの問題提起に答えつつ、すぐれた宗教的構想力を有していた大川のイスラーム論を再構築していく。それはオリエンタリストの言説でもある。それゆえ大川はイスラームを具体化し、現状分析を欠落させる。だが、大川の基本的方法は「理想型に対する偏差として現実を見る」ことである。理念型から現状を分析すること、すなわちアクティヴでクリティカルであることは、誤るかもしれないが罪にはならない。大川のムハンマド論への共感を隠さない著者は、地域研究の専門家として、しかし地域研究を批判的に問おうとする姿勢が垣間見える。実証を積み重ねることで「他者」の問題を不問に付す実証的な地域研究が、大川に対して優っているとはいえないからだ。

実際、著者はクリティカルなアプローチの実践として、東京裁判とイラク裁判——イラク高等法院によるサッダー

ム裁判——という共約困難な二つの裁判を比較する。大川は世界のグローバル化(「欧羅巴化」とイギリスによるイラク占領を批判していた。そうした知見を踏まえて極東軍事裁判の正当性を批判した大川の実在は、米軍の占領下でおこなわれた「国際化された国内法廷」としての裁判に挑戦したサッダー・フセインに重なる。この主張によって、本書は今日、情緒的に動員される大川周明論とは一線を画して、アメリカの覇権主義を批判する思想に歴史的な文脈を与える。

著者は最後に大川のイスラーム学の継承者として井筒俊彦の「精神的東洋論」を示唆する。だが、そうした形而上学に耽溺することは、すでに著者の立場ではないだろう。本書は批判的地域研究の節度を守ることで大川周明という思想史上のタブーを転覆することをめざした挑戦の書である。それを可能にしたことに著者が賭けた「学問の節操」がある。

(東京外国語大学国際日本研究センター専任講師、日本思想史)

「断層」もある。大川の場合、このことは「現人神」